



**東ティモール  
フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅  
(2011年8月27日~9月3日)  
報告集**



**特定非営利活動法人パルシック**

## 目次

ツアー日程表.....	2
ツアー参加者/パルシックススタッフ紹介(敬称略).....	4
はじめに(東京事務所インターン 當舎小百合).....	5
ツアー参加者の感想.....	7
スタディー・ツアーで“スタディー”したこと(荒川宣子).....	7
未知の国東ティモールを訪れて(上村美紗子).....	9
東ティモールを旅して(桃原節子).....	11
東ティモール―フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して(宮吉功也).....	13
2011年 東ティモールスタディツアー感想文(八木田道敏).....	15
ハヒタリ集落コーヒー生産者へのインタビュー.....	16
東ティモール事務所スタッフの感想.....	17
東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して(短期インターン 篠原亜絵).....	17
東ティモールツアー2011年を終えて(現地業務責任者 伊藤淳子).....	18

### 訪問先地図

(東ティモール民主共和国アイナロ県マウベシ郡ハヒタリ集落)



## ツアー日程表

日付	曜日	時間	行程	宿泊地	ホテル
8月27日	土	8:50 11:00 17:30 18:30 19:30	成田空港集合 成田発 (GA881) デンパサール着、入国手続き 空港⇒ホテル (車移動) 夕食(KOKO)	デンパサール	Fourteen Roses Beach Hotel TEL)+62-0361-759998 Jl Melasti, Kuta, Bali 8036, Indonesia
8月28日	日	7:00 7:45 10:15 13:05 13:30 14:00 15:00 18:00	朝食(Hotel Audian) ホテル⇒空港 (車移動) デンパサール発 (MZ8480) *機内で昼食 ディリ着、入国手続き後、現地スタッフと合流 空港⇒ホテル (車移動) ホテルチェックイン ディリ市内観光 (サンタクルス墓地→タイスマーケット→キリスト・レイ) 夕食 (Golden Star)	ディリ	Hotel Audian TEL)+670-(0)3323080  Jl. 15 Oktober, Dili, East Timor
8月29日	月	8:00 9:00 9:30 11:00 12:00 13:00 14:00 17:00 18:00	朝食 (Hotel Audian) ホテル⇒パルシック事務所 (車移動) パルシック事務所にてオリエンテーション 元受容真実和解委員会(CAVR)事務所見学 昼食(Restorante Linivon) ハリラン市場にて村への土産、野菜等購入 ディリ⇒マウベシ (車移動) ホテルチェックイン 夕食(Restorante Sara)	マウベシ	Hotel Pousada TEL)+670-734-5321  Pousada de Maubisse, Maubisse sub-district of Ainaro District, East Timor
8月30日	火	8:00 9:00 10:00 12:00 13:00 16:00 18:00 20:00	朝食 (Pousada) マウベシ市場にて野菜等買い物 マウベシ⇒ハヒタリ集落(車移動) ハヒタリ集落到着、村の方々へ挨拶 昼食 自由時間(けん玉・折り紙を子どもたちに紹介、夕食準備手伝いなど) 夕食 村の方々とダンスパーティー(第1弾)	ハヒタリ	Hahitali, Suco Manetu, Maubisse sub-district of Ainaro District, East Timor

8月31日	水	9:00 朝食 10:00 コーヒー収穫手伝い 12:00 昼食 15:00 ハヒタリ名物「ヤシ蒸留酒」試飲ツアー 18:00 ビデオ上映会 19:00 夕食 20:00 村の方々とダンスパーティー(第2弾)	ハヒタリ	Hahitali, Suco Manetu, Maubisse sub-district of Ainaro District, East Timor
9月1日	木	9:00 朝食 10:00 コーヒーの収穫・加工手伝い 12:00 昼食 14:00 村の方々とお別れ会 15:00 ハヒタリ⇒マウベシ (※1) 17:00 ホテルチェックイン 19:00 夕食(パルシックマウベシ事務所)	マウベシ	Hotel Pousada
9月2日	金	8:00 朝食 9:00 マウベシ⇒ディリ (車移動) 12:00 ホテルチェックイン 12:30 昼食 (Guangzhou Restaurant) 15:00 NGO La' o Hamutuk 訪問 18:00 夕食 (Restaurante Victoria Metiant)	ディリ	Hotel Audian
9月3日	土	7:30 朝食 (Hotel Audian) 9:00 アローラ財団にて土産買い物 10:30 コーヒー加工場(PT Nakroman)訪問 12:00 空港チェックイン ⇒昼食 (Pindy Express Restaurant) 13:45 ディリ発 (MZ8490) 14:35 デンパサール着 16:00 空港⇒ホテル (車移動) 17:00 自由行動、夕食 19:00 ホテル⇒空港 (車移動) 20:00 空港チェックイン (※2)	機内泊	休憩用ホテル Mastapa Garden Hotel TEL)+62-(0)36-751660 Jl. Legian 139, Kuta, Bali 80361, Indonesia
9月4日	日	0:30 デンパサール発 (GA880) 08:50 成田着後、自由解散		

## ツアー参加者 / パルシックスタッフ紹介(敬称略)



### 【後列】

(左から) Jorge dos Santos (P)、八木田道敏、João da Costa (P)、大坂智美 (P)、伊藤淳子 (P)、  
當舎小百合 (P)、宮吉功也、Jeremias Sarmento Lopes (P)

### 【前列】

Amaro Martins Ferreira (P)、荒川宣子、桃原節子、日高真紀子、上村美紗子



【上】篠原亜絵 (P)

【左】Nelson Jose Fatima Alves (P)

※紙面の都合上、写真は掲載できませんが、  
ツアーに携わったパルシックの東ティモール人  
スタッフの名前を以下に掲載します。

Angelina da Silva

Maria Jose Menezes

Marcelino Mendonsa Martins

※(P) = パルシックのスタッフ

## はじめに

パルシック東京事務所インターン

とうしや  
當舎小百合

2011年8月27日～9月4日、パルシックの『東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅』は催行されました。ツアーの参加者は合計で6名と小規模でしたが、その分、私たちパルシックのスタッフを交え、コーヒー生産者の皆さんとじっくり、味のある『東ティモール時間』を過ごすことができたのではないかと感じています。

北は北海道から南は沖縄県まで、遠方からはるばるお越しくくださった参加者の皆様と成田空港で初日に集合した時には、正直に申し上げますと不安でいっぱいでした。なぜならこの2年間、研究者の卵として東ティモールへは数回訪問し、2010年に催行された同ツアーにもインターンとして参加させて頂いてはおりましたが、参加者の皆様を一人で日本から東ティモールまでご案内させて頂くのは、初めての経験だったからです。同行スタッフとして至らない点ばかりの私をツアー中に励まし、サポートし続けてくださった参加者の皆様に、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

例年どおり、多様なバックグラウンドを有し、異なる世代に属する皆様にご参加くださるこのツアーで、今年も皆さんそれぞれが有意義な時間を過ごすことができるだろうか、と、いささか準備段階から心配をしておりました。しかし、皆さんが訪問集落のハヒタリで、またはマウベシのホテルで、コーヒーを飲んだり、満点の星空を見たりしながら、夜な夜なフェアトレードや東ティモールについて深く議論している光景をツアー中度々目撃することができ、大変うれしく思いました。



▲けん玉で遊ぶツアー参加者と村の方々



▲集落までの山道

今回訪問したハヒタリ集落は、首都ディリから車で約3～4時間南に下ったアイナロ県マウベシ郡中心地から、更に車で2～3時間ほど走った山中にあります。準備段階では、マウベシ市街から集落までの道（コンクリート舗装されていない、岩だらけの道）が雨のたびに崩れてしまい、直前まで訪問集落を変更すべきか否かについての議論が、東ティモールー東京事務所間で交わされていました。しかしながら、幸運にも天候に恵まれたこと、そして何より道が崩れる度にパルシックの東ティモール人スタッフ、そしてハヒタリ集落の皆さんが、懸命に土で道を舗装し、道中に埋まっている岩を除去してくれたおかげで、私たちは無事に車で集落までアクセスすることができました。コーヒーの不作に見舞われた今年、ただでさえ生活が厳しい中で、膨大な時間を割いて私たちを温かく迎える準備をし

てくれたハヒタリ集落の皆さんをはじめ、それをサポートし続けてくれた東ティモール事務所のスタッフに、心から感謝しております。Obrigada barak! (テトゥン語で“どうもありがとう”の意)

予定より早く集落に到着した私たちを待っていたのは、集落の方々による猛烈な歓迎でした。集落の皆さんは花できれいに飾った手作りの門の周りに集まり、軽やかなバイオリンとギターの演奏と共に、私たちを待っていました。集落長の挨拶が終わり、花びらのシャワーを浴びながら門をくぐった私たちは、巻きたばこ・噛みタバコ(ビンロウジの実、石灰をキンマの葉にくるみ、奥歯で噛む嗜好品)を吸う場所へ誘われました。これは他の東南アジア地域と同様に、客人を迎える際に行われる習慣です。



▲温かく迎えてくれたハヒタリ集落の皆さん

初めての噛みタバコの味に顔をしかめる参加者の方々もいらっしゃいましたが、首都ディリでは体験できない貴重なおもてなしを受けることができました。



集落の皆さんがコーヒーチェリーの収穫を待ってくださったこともあり、無事にツアー参加者の皆さんと一緒に収穫体験をすることができました。日本で毎日飲んでいるコーヒーが、どのように収穫・加工されているのか、現場に赴き、自らの体験を通して知ることができて良かったとのご感想を、参加者の皆様から頂いております。

また、集落の方々のご協力のもと、急遽この地域の特産物であるヤシ酒を試飲する小遠足を実現することができました。普段東ティモールの方々でも飲むことが珍しい、出来立てほやほやのヤシ酒を、——コカウグループ長が持つ拡声器から流れる「タイタニック」のテーマを聞きながら——、皆で汗水たらして飲みに行ったことは、忘れられない思い出です。

加えて、フェアトレードコーヒー生産者を訪問後、ディリの NGO La'o Hamutuk (テトゥン語で『共に歩く』の意)にて、東ティモールの経済状況について同 NGO スタッフよりブリーフィングを受けることが出来たことは、この国の人々の将来を、そしてフェアトレードの役割と可能性について考えるうえで、大変意義深いものでした。

東ティモールにいと、「日本では考えられないほど〇〇するのに時間がかかる」、といった場面に多く出会います。これを「もどかしい!」と感じる日本人も多いかと思いますが、そのゆったりと流れる時間に身を任せると、村の子どもたちと気ままに遊んだり、炊事担当のおばちゃん達とおしゃべりしたりと、彼らと心を通わせる機会が自然と生まれることは、東ティモールの魅力のひとつです。今後も、他のツアーでは体験しがたい、生きた東ティモールと出会う「フェアトレードコーヒー生産者を訪れる旅」を継続していくことで、私たちと東ティモールの人々のつながりをより豊かなものにすると同時に、フェアトレードのひとつのあり方を社会に提示することができれば幸いです。次回以降の東ティモールツアーへの皆様のご参加を、スタッフ一同心待ちにしております。

## ツアー参加者の感想

### スタディー・ツアーで“スタディー”したこと

荒川 宣子

コーヒーは東ティモールの主輸出産業であり、国家はもちろん、それに携わる人々にとっても、重要な収入源だと思っていた。ところが、東ティモールの NGO、La'o Hamutuk で、コーヒーよりも、国家予算向上のためにはバニラやキャンドルナッツ等の輸出に力をいれなければならないと聞いて、いささか驚いた。

コーヒー産業の莫大な利益（1600 万ドル／年）はアメリカの非営利連合 NCBA に入っているようだ。伊藤淳子代表の話によると、マウベシの 1 世帯当りのコーヒーによる収入は、2010 年が 340 ドル／年、不作の今年はずか 180 ドル。コーヒー収入は 3, 4 か月で使い切ると聞いたが、今年はずか 2 か月持つか持たないかだろう。収入のない月はどうしているのだろうか。ハヒタリ村にはさほど広くはないが野菜畑があった。それだけでも、ほっとする。大切な何かを自分たちの手で生み出しているのだから。

仕事がない若者も多いと聞く。なぜ、仕事がないかと言えば、国として自立していく国内産業が殆んど育っていないからである。主食である米も安価な輸入米に頼り、ディリのスーパーで見た、ありとあらゆる生活用品はインドネシアやオーストラリア製であった。La'o Hamutuk の人が言っていたが、原材料（たとえば果物類）は豊富にあるのにジュースはシンガポールから輸入しているというのが現状である。

国家予算 95%は、後、14, 5 年で枯渇すると言われる石油からの収入である。今は、輸入するお金があるからいいが、それが、なくなったらどうするのだろうか。訪れたハヒタリ村では乳幼児の多さに驚いた。村で出会った 25 歳の母親は、既に、5 人の子持ちだが、8 人ぐらいは欲しいと言っていた。統計によると、東ティモールでは石油収入がなくなるまでに、40 万人の子どもが生まれるとか。少子化で悩む日本から見れば、国を背負う青少年が増えるのは頼もしいが、100 万人超の人口の二分の一が青少年で、農産業は育たずに仕事がないとなったら、問題は別だ。

事前にマウベシは寒暖の差が激しいと聞いていたが、日中は T シャツで十分。夜は重ね着をして薄〜い上掛けをかけ（冷えるとわかっていて、そして、ここは一応ホテルなのに、どうして、こんなに薄いものと思いつつ）眠りについたが、寒さで目が覚めた。民泊後、再度、同じホテルに泊まったときは、持参したものを上から下まですべて身に着け、スリーピングバッグにもぐり込んで、かろうじて眠ることができた。東京でコーヒー豆を買ったり、飲んだりする度に、「君たちの故郷はあの昼夜の温度差が激しい高地なのね」と思いを馳せてしまう。

女性の生活向上支援の具体的な事例を、パルシク・スタッフから二例、そして、訪問したアロラ・ショップで、さらに、一例、知った。こういった活動がもっと増え、なによりも、東ティモール人自身の手で、生活向上のアイデアが考え出され、具体化されたら未来とつながっていくのだがと思わずにはいられない。



**\*マウベシで作られている「さつまいもチップス」。**

とてもおいしくて手が止まらない！と、一緒に楽しんだ友人たちが言っていた。つぶれるかと思って、少ししか買ってこなかったのだが、大丈夫。次回、ツアーにいらっしゃる方々、おみやげにぴったりですよ。

**\*「ドライハーブティー」。**

ディリの事務所に山積みされ、アボカドやライムがやさしい香りを漂わせていた。これから商品化することのこと。くせのないあっさりした味で、煎茶のように急須で飲めるのがよい。これも軽くておみやげによい。

**\*「アロラ・ショップ (Alora Shop)」。**

グスマオ首相の奥さんのクリスティーさんが2001年に開設。東ティモール唯一のフェアトレードの店で、伝統的な織物「タイス」を使って、質の高い手作り製品をつくり、作り手の女性たちのみならず、その家族の健康や教育、生活の向上を助けている。デザインも質も優れていて、どれもこれもみんな欲しくなる。

“スタディー”したことはまだまだあるが、最後に、もう一つ。

それは、村人の我々に示してくれた心温かい準備と思いやり、パルシック・スタッフの伊藤さん、大坂さん、インターンの篠原さんの、村人へとツアー参加者への心遣いである。優しく静かに、さりげなくそれがなされていて、ああ、見習いたいなと思った。

みんな、みんな あ り が と う (●^o^●)



▲サツマイモチップス等を作るマウベシ女性グループの皆さん



▲マウベシ市場にて買い物！

## 未知の国東ティモールを訪れて

上村 美紗子

私は最初、東ティモールがどういう国なのか全く想像がつかなかった。書籍で読んでみると、インドネシア兵の虐殺や独立への苦難が生々しく描かれており、日本軍占領やそこでの暴力等に関する記述を見るにつけ、一体日本人としてどんな顔をして現地の人々と接したらよいのだろうと思った。それと同時に、東ティモールでの体験は自分の今後にとって貴重で有意義な旅になるだろうという期待感があった。今回のツアーはそれを裏切らなかった。

華やかなバリ島で身も心も浮かれた気分になり、目的を半ば忘れかけていた状態で飛行機に搭乗。雲の絨毯を抜けたところでティモール島が目に見え、窓越しに広がる赤土の山々と群青色の空のコントラストが美しい。ほとんど無人島のように見え、ここに本当に人間が住んでいるのだろうかと思えるほど自然そのままの姿がそこにはあった。小さな空港に降り立つと、迷彩服を身に纏った無表情な男性達が出迎えており、少なからず緊張感を覚え身が引き締まった。ついに東ティモールに入国したのだという実感がひしひしと湧いてきた。

フェアトレードに未来はあるのだろうか。それを探るためのヒントを見つけ出すことが今回このツアーに参加した目的だった。フェアトレードは途上国の生産者にどのように関わっているのか、今後発展していくポテンシャルはあるのか。消費者目線からしかフェアトレードを見ることができていなかった自分にとって、実際に現地へ行ってこの目で確かめない限り、本当の意味でフェアトレードについて語れないと思った。

私は当初、フェアトレードは対等なビジネスパートナーシップであり、生産者側が同じ土俵の上に立ち、先進国の業者と途上国の生産者双方にとって Win-Win の関係を築く理想的な取引の形を追求したものであると認識していた。その甘い考えはハヒタリ集落で現実を目の当たりにし、見事に覆された。村人たちは日本に「支援してもらっている」という感覚が強い。正直、PARCIC に対して物品の要求をしている彼らを見て、少し凶々しいのではないかと思ひ、やや落胆したことは否めない。彼らはとても対等な取引ができる状態ではないのだ。しかし、絶対的な経済格差が存在する中、フェアとは遠くかけ離れた状況下で私達が接している限り、対等に取引をするという構想を実現する事はとても難しいことなのだ。フェアトレードは完全なビジネスなどではなく、ロットが小さいボランティア的な要素に大きく支えられてその形を維持している。現地の人々の中に自立の精神が芽生え、この国が本当の意味で独立するまでには長い時間がかかりそうだ。それまでは一方的な支援になってしまうとしても、いつか彼らが自力で対等に取引ができるよう促す取り組みがフェアトレードなのだ。

そう解釈したものの、NGO の方々がわざわざ遠い途上国に滞在して骨の折れる仕事をしてまで彼らのために働く意味とは一体何なのか、と正直思ってしまった。その答えは、ハヒタリ集落で人々と接しているうちに、なんとなく見えてきた気がした。それは理屈なんかじゃない。あえて言葉で表現するなら、コーヒーチェリーを摘んだりヤシ酒を飲んだりダンスを踊って、村人たちと時間を共有している中で、国籍を超えた人間同士の絆を感じた。それが PARCIC のスタッフとハヒタリ集落の人々が共有しているものだ。彼らはただ支援し、支援されているだけでの関係ではなく、時に冗談を言い合ったり喧嘩したり、共に喜びを分かち合ったり、そういう人間同士の関わり合いをしているのだ。外国人という立場

から、現地人と助け合いながら生きるという事を実践している。それがNGOの活動であり、フェアトレードなのかもしれない。

また、原始的な生活をしている彼らと自分達が同じ時代を生きることがとても不思議な感じがした。そして「豊かさとは何か？」ということのを大いに考えさせられた。先進国の価値観で、経済的な指標で豊かさを測ると、確かに彼らは貧しいかもしれない。しかし、別の指標で測ったらそれは見事に逆転してしまうだろう。それは精神的豊かさといえるかもしれない。無論ハヒタリの人々の暮らしは楽ではない。でも、彼らは生きる術を知っていて、器用に限られたものを使いこなして、見事に自然と調和しながら逞しく生きている。そして何より、人と人との繋がりをとても大切にしている。そんな彼らの姿から学んだことは計り知れない。マウベシの美しい風景に夜の空一面に散りばめられた息を呑むように美しい星たち、みんなと笑い転げながらまるで子供の心に戻ったかのように山を歩いて踊りを踊って。トラクターに荷台からみんなに大きな声で挨拶すると、みんなが返事と共に素敵な笑顔を見せてくれる。完全な貨幣経済から大きく切り離された世界だからこそ、そこには換金できない価値が多いにある。東ティモールには、そんな宝物がいっぱい詰まっています、それは日本では見つけられないものだ。

最後に、このツアーを企画して下さった PARCIC のみなさん、私達日本人を快く歓迎して下さいました。全ての人に感謝です。フェアトレードは、今は草の根活動。でも、生産者と消費者の距離をうんと縮めてくれる。生産者は消費者の様子や美味しそうにコーヒーを飲む写真を見て、元気を出してコーヒーづくりに励む。消費者は遠い生産国や村人たちに思いを馳せながら、大切に一杯のコーヒーをいただく。それは心のこもった貿易。この活動が、ずっと続いて欲しい。それが私の願いです。



▲東ティモールの人は踊りが大好きです！

## 東ティモールを旅して

沖縄県 <sup>とうばる</sup> 桃原 節子

はじめに

「東ティモールに行く」と言ったとき、「治安は？」とか「大丈夫？」と聞く人は、東ティモールのことを知っている人である。だいたい「どこにあるの？」であった。私自身も「赤道を越えた、インドネシアの近くで、少し前に独立と治安悪化があったような・・・」程度の知識でしかなかった。今回、「フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」に参加したのは、何年か前にパルクからティモールコーヒーを買ったことによる。

実際に訪問し、帰る頃には、豊かな自然に囲まれた国で暮らす人々が、懸命に生活する姿が印象に残った。

つれづれなるままに・・・思いついたことを、順不同で。

- ・独立して来年で10年。山岳地帯の隅々にまで学校ができ、義務教育が軌道に乗り出した。独立後、二つの公用語を採用。それがティトゥン語とポルトガル語。ポルトガル領時代が長く、年配の世代はポルトガル語を理解するが、その後のインドネシア時代の世代はインドネシア語のほうがわかりやすいという。学校で子どもたちに教える教師は、ポルトガル語の講習が必要な人もいるらしい。もともと東ティモールは、それぞれの言語を持つ多くの部族からなり、国として統一するのも困難であったろう。住民にとって日常で使う言葉はとても重要である。
- ・東ティモールはコーヒーの産地。数年前、パルクからコーヒーを購入した。それが今回の旅へのきっかけである。コーヒーは熱い所で栽培されると思っていた。とんでもない。とにかく寒暖の差が必要とのこと。そして直射日光を遮るシェイドトゥリーが必要。訪問したハヒタリ村は、標高1200Mの高地。昼間は汗だらけになり、帽子を必要とするが、朝や夜はまるで冬のように冷え込む。特に夜は、長袖を着こんだ寝袋の中でも寒かった。今年は、コーヒーが不作だったらしい。村の人は、日本からやってくる数人のために、コーヒーの赤い実を木に残してくれていた。まるでサクランボ。チェリーと呼ぶ意味がよくわかる。コーヒーの木は細い。木の実を採るように木によじ登るわけにはいかない。実のありそうな枝を引き寄せて摘み取っていく。しかも斜面にあるので、足元は不安定である。村人たちは、言葉も通じない私たちのために、懸命に枝を引き寄せ、「ここから採れ」と手招きする。言語は全く通じなかったが、気持はよく理解できた。

その後、コーヒーの実が飲むコーヒーになるまでを見せてもらった。果肉を取って乾燥させた状態のパーチメントを土産にもらう。自分で殻をとり、フライパンで焙煎し、ミルでひいて飲む予定だ。ミルを購入しようと思う。

- ・わずかでも英語が通じると思っていた。とんでもない思い上がりである。世界中どこに行っても英語さえあればなんとかなる、と無意識に考えていた。「これは何？」というティトゥン語を教えてもらい、キッチンでノートを持って村のお母さんたちに尋ねる。いやな顔もせずに教えてくれる。短時間で現地語の語彙を増やすにはこの方法は有効である。さらに、コミュニケーションも持てる。中学生くらいの女の子が関心を示した。懸命に、積極的にいろいろな単語を教えてくれた。しまいには、私のノートに作文を書き連ねた。そこには、日本に行って友だちをつくり、一緒に遊び、勉強したいことや

今夜ダンスをしようなどと書いてあった。それにしても、二泊滞在したハヒタリ村の子どもたちが教えてくれた言語は、ポルトガル語ではなく、ティトゥン語とマンバイ語（どちらも現地語）であった。

- ・ 首都ディリの街。海岸沿いにある。週日は人が多く活気に満ちている。果物や野菜を売るおばちゃん、おじちゃんに混じって子どもたちがよく働いている。あちこちで手持無沙汰そうにしている人もよく見かける。地方から職を求めて出てきた人たちがたくさんいるようだ。スーパーをのぞくと、あらゆるものが外国製である。スナック菓子、洗剤、日用品、アイスや肉類（ブラジルからのチキンが多かった）の冷凍食品など。

伝統的な織物、タイスでつくられた小物を土産に買う。つくって販売している女性たちは、手に技術を持って、現金収入を得る努力をしている人たちだった。左手に乳飲み子を抱えながら、外国語を話す観光客を相手に商売をする。近くでは、男たちが座り込んでゲームをしている。ショルダーバッグは「3つ買うから安くして・・・」と交渉する自分を反省しつつも、安くしてもらった。

## おわりに

国を立て直し、子どもたちの教育を整えていく様子がかがえた。ベビーブームの中で、充実した子育て・教育ができるような環境が必要だと感じた。弱者に目を向けた国づくりに、女性たちの声を反映させて欲しいものである。他国からの物資や文化の急激な流入などで、ティモールの暮らしが変化し、伝統的な文化までも失ってしまわないように願うばかりである。



▲ハヒタリ集落の子どもたちと一緒に

## 東ティモール—フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して

宮吉 功也

私はフェアトレードコーヒーに携わる者として、色々な生産地を訪問しています。  
しかし圃場へ訪問する事はあっても生産者の暮らしを体験する機会は今までありませんでした。  
フェアトレードに携わる者とし、生産地を見るだけでなく生活を「体験する」事なく消費者への説明は出来ないと考え、今回のツアーに参加しました。  
私自身、東ティモールへの訪問は今回で5回目となります。

### 【いざ生産者の元へ！】

首都ディリから車で約 2 時間パルシックの拠点でもあるマウベシへ移動。

マウベシまでは比較的舗装された道。

そのマウベシから車で約 3 時間、山道をひたすら進み山奥にあるハヒタリ村落を目指す。



### 【ハヒタリ村】

山道を進みいくつかの集落を越えて、ようやく目的地のハヒタリ村に到着。

村人全員がツアー参加者の到着を、首を長くして待っていたようで人だかりが出来ていた。

初めて接触する私達外国人に対して興味津々な様子でした。



### 【非日常的な体験】

村人達は歓迎の意を込めて、大事な資産である豚をツアー参加者のために振舞ってくれた。

目の前で屠畜された時は、初めて見る光景に目を疑った。食べることに、それは残酷なことであり、命を頂いている事を改めて思い知らされた。

電気・ガス・水道のないハヒタリ村では薪を使って料理をする。

水汲みや火を熾すところから始める料理など、家事がいかに重労働でそれを担う女性が一番苦勞している事を実感した。

コーヒー収穫作業は、コーヒーの木が急峻な山肌に自生しているため、足場も悪い状態で一粒ずつ手積みをしており、これもまた重労働。

その後、水洗→脱肉→水洗→発酵→水洗→乾燥という一次加工を一通り体験した。

今回のツアーでコーヒー収穫作業と、生産者の生活の苦勞、そして村人達の温かさを存分に味わうことができ、またひとつコーヒー豆一粒の大切さ、重さを感じた。

改めて自分が携わっている「生産者との直接貿易によるフェアトレードコーヒー」は、このような生産者と消費者を繋いでいると実感しました。

実体験したからこそ語るができるフェアトレードを消費者へ伝えて行きたいと思います。

パルシクさんは、このような貴重な体験をできるツアーを今後とも続けて行って下さい。  
アattendして下さった伊藤さん、大坂さん、當舎さん、篠原さんありがとうございました。



←カメラに興味津々の子どもたち

## 2011年 東ティモールスタディツアー感想文

八木田 道敏

私は昨年に引き続いてのツアー参加です。

去年は札幌の自由学園「遊」の講座の仲間が行くというので、何の知識もないまま興味本位で行ったのですが、それまで馴染んでいた旅行代理店のパックツアーとは大違いのところが入り、今年も参加することにしました。

今回の北海道からの参加者は私一人で、後で報告会もあるというので、フェアトレードのことも事前に多少勉強して参加しましたが、幸いにも参加者の中にフェアトレードコーヒーのプロ・M氏がおり、他の参加者と共に色々なお話を聞くことができ、大いに参考になりました。

去年の感想文で、山間地ロビボ村での夜間の冷え込みについて書きましたが、今年もマウベシ郡の夜間の寒さは相変わらずで、思わぬ失敗をしてしまいました。

今回の訪問先ハヒタリ集落での交流を終え、マウベシのホテルに帰って水シャワーを使った後、パルシクのマウベシ事務所で事務所スタッフ一同と共に豪華ディナーをいただいたのですが、なぜかその時テーブルの上に九州の麦焼酎が1本あったのです。そこに女性活動グループの新製品ハーブティがでてきたので、麦焼酎をハーブティで割って試したところ中々の美味。つつい杯を重ねているうちにすっかりいい気持になってしまいました。食事を終え、ホテルに戻ると早々に部屋に戻って寝ましたが、酔っていたためか、そこがマウベシ郡であることも考えず、いつものように上着を脱いで寝てしまい、朝方、寒さで目が覚めた時には既に遅く、風邪を引いてしまいました。

翌日は午前中にディリに戻り、昼食後に現地 NGO を訪問しました。ディリは南太平洋の海岸の街でもあり、日中は風邪もあまり気になりませんが、夕食を終えるころにはだんだんと症状が出てきました。そこで、パルシクの伊藤さんから風邪薬（日本製、市販の物）、ツアー参加者 T さんから「ヒエピタ」（同）を頂き、皆より一足先にホテルに帰して貰い早々に就寝しました。「風邪薬」、「ヒエピタ」、「十分な休息」の3点セットが効いたため翌朝には回復。念のため風邪薬は飲み続けましたが、帰国時には全快状態でした。

今は、夜な夜な、北海道産の焼酎をハーブティで割り身体を温めております。

皆さんお世話になりました。なお、10月1日に「ほっかいどうピーストレード」での報告会をすませ、あとは苦手なこの感想文を書いたところで、今回のスタディツアーも一段落です。ありがとうございました。



←出来立てほやほやのヤシ酒を飲みました！！



## ハヒタリ集落コーヒー生産者へのインタビュー



Q.マウベシ組合を通じてコーヒーを出荷するようになって、良かったこと、逆に困っていることは何ですか？

A. 今年はコーヒー収量が大変少なかった。動物(ねずみ)に食べられたりもして被害もあった。良かったことは、みんなで力を合わせてコーヒー畑を協同で除草したり、共同作業をしたりするようになった。

Q.来年自分たちでチャレンジしたいと思っていることは？

A. 女性グループの活動としてヤシ酒づくりをしようと思っているが、まだ資材が届かない。また、石鹼作りもやってみたい。コーヒーについては、機械はあるがチェリー槽(脱肉後のチェリーを発酵させる槽)がない。

Q. パルシックの日本人スタッフと関わるようになって改善されたことは？

A. 機械や乾燥台、ビニールシート、バケツ、セメントなどの資材が来た。これからはカタナ、かなてこ、のこぎりなどの機材が欲しい。

Q. 1キロ当たり20セントのグループ資金を今後何に使いたいですか？

A. 資金がまだ足りないので具体的な計画は立てていない。2~3トン出荷できるようになるとまとまった資金ができて良い。資金がたまったら何かしたい。

加えて、市場が味方についていない。人びとは片道10キロの道を、農作物を担いで市場まで売りに行く。組合が代表して政府に道路の修復を呼びかけてほしい



Q. 野菜栽培はしていますか？個人/共同で？

A. 個人でしています(トウモロコシなど)

Q. サツマイモチップスづくりには参加していますか？

A. 参加したいが、チップス作りが行なわれているパルシックマウベシ事務所まで遠い。

※質問に対する回答は、生産者の方々が答えたものを、そのまま要約して掲載しています。

## 東ティモール事務所スタッフの感想

### 東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅に参加して

パルシック東ティモール事務所  
短期インターン 篠原 亜絵

パルシック東京事務所のインターンとして働かせていただいたことがきっかけで、岡山大学院博士前期課程となった今も、フィールド先を東ティモールに置いて研究をしています。と言いつつ、東ティモールに関しては、皆さんが来る一週間前に現地入りしただけで、テトゥン語はもちろん、現地情勢の何もかもが分からない状態でした。こんな右往左往している自分が、ツアーの皆さんを迎え入れることができるのかどうか、不安でいっぱいでしたが、そんな不安は何のその。本当に楽しく、心に残り続けるツアーとなりました。ありがとうございました。

サンタクルス墓地や元受容真実和解委員会（CAVR）では、東ティモールが歩んできた歴史を知り、考える、とても良い機会になりました。この歴史が二度と繰り返しませんように、この先ずっと平和でありますようにと、願わずにはられません。

一番の思い出はやはり民泊でしょうか。着いたときのお花のシャワーや、竹で作ったアーチ、歓迎の儀式など、東ティモールの方々の心遣いに大大感動でした。ツアーでハヒタリを訪れるつい一週間前にあいさつしたときは、また違った衝撃がありました（！）、ツアーでは、貴重な豚をご馳走してくれたり、詰んだコーヒーチェリーを私のかごがいっぱいになるまで分けてくれたり、おいしいコーヒーを焙煎してくれたり、椰子酒を取りに連れていってくれたり、夜通しダンスをして歓迎してくれたり・・・その全てに愛を感じて、今でも思い出すと胸が熱くなります。“フェアトレード”とは一体何を意味するのか。到達点はまだまだ先かも知れないけれど、日本人と東ティモールはこんなにも親しく繋がることができて、こんなにも互いを思いやることができるのだと、とても胸が熱くなりました。

こうした、素晴らしい体験・経験ができたのも、素晴らしいツアー参加者の皆さんがいてくれたからこそだと思っています。改めて、本当にありがとうございました。

日々の生活に追われて色んなことを忘れがちですが、コーヒー一杯の中には、たくさんの工程と、たくさんの人の繋がりがあつたことを、やはり考える必要があります。コーヒーブレイクは、ゆっくりと一そして思いを馳せながら、私も頑張ろうと思う今日この頃です。

マウベシの絶景と大坂さんとアンジェリーナさん→



## 東ティモールツアー2011年を終えて

パルシック東ティモール事務所  
現地業務責任者 伊藤 淳子

今年もパルシックツアー参加者がマウベシのコーヒー生産者を訪ね、一緒にコーヒーの収穫や加工作業を体験しました。目玉はコーヒー生産者宅に泊まらせていただく「民泊」。二晩お世話になり、恒例のおもてなし「朝までダンスパーティ」にもお付き合いし（午前0時でギブアップ）、泊めていただいたお宅の赤ちゃんの夜泣き、四六時中鳴くにわとりにも付き合い、ただ東ティモールへ旅行に訪れるだけでは味わうことのできない、ディープな東ティモールを堪能しました。

毎年受け入れてくれる生産者グループにとっても、日本からお客さんが泊りがけでやってきてくれるのは大変に嬉しいようです。今年訪ねたハヒタリ集落では、発電機や音響設備を近所から借りてきて、コーヒー豆の乾燥場にビニールシートでテントを張り、美しい花で飾ったゲート、バイオリンとギターの楽団、切り出してきたコーヒーの木の下に莫蔭を敷き、おばさま方がシリーの葉とビンロウジの実、刻みタバコを用意して客人をもてなしてくれました。普段接する生産者たちとは何だか違って見えます。

生産者のみなさんに少しでも楽しんでもらおうと、わたしたちも数本の映像とプロジェクターを用意して行きました。普段電気がない村で上映会は村人たちにとって大きな娯楽です。寒い夜空の下、身を寄せ合ってじーっと食い入るように観ています。今年は2009年にオーストラリアで制作された『バリボ』という映画と、2005年にNHK-BS『地球街角アングル』でマウベシのコーヒー生産者の活動を取り上げたものを観ました。当時マウベシ・コーヒー生産者組合（ココマウ）コーディネーターとして6つの集落をバイクで駆けまわっていたフランシスコさん（パルシックウェブサイト『コーヒー生産者の声』で紹介しています）が主役で、まだテトゥン語のできなかつたわたしがインドネシア語で通訳をしたのでした。

日本からの参加者のみなさんを案内し、ハヒタリの人びとのあたたかいおもてなしの中で、05年の映像をみながら湧きあがる感情がありました。独立した後、誰にも依存せずに自分たちの自立した経済基盤を築きあげようと、一緒に夢を見てきた人たちの顔がありました。インドネシア語ができるというだけでコーヒーについても組合についても何も知らない外国人に信頼を寄せてくれ、理想を語るこちらと現実との間で悩みながらも夢を語ってくれた人たちに、あれから6年、報いはあつたらうか。25,000ドルという、東ティモールの農民組織では前例のない多額の資本を蓄えて、2011年5月、ココマウは集落ごと11のグループに資本を分割し、小グループ運営へ移行しました。この過程が、彼らが夢見る自立へのステップであるように、そしてわたしたちの存在がその過程を勇気づけこそすれ挫くものでないように、と願わずにいられませんでした。

※本文は、パルシックウェブサイト(HOME>民際協カプロジェクト>東ティモールでの活動>レポート>『東ティモールツアー2011を終えて(9月22日)』: [http://www.parcic.org/project/timor/report/articles/2011.0922\\_tour2011.html](http://www.parcic.org/project/timor/report/articles/2011.0922_tour2011.html))にて掲載した文章を引用しております。



**特定非営利活動法人パルシック**  
**〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11**  
**TEL)03-3253-8990**  
**FAX)03-5209-3453**  
**Email) office@parcic.org**  
**Web) <http://www.parcic.org/>**  
**Twitter)@parcic\_office Facebook)パルシック**